

## コロナ危機への医学的見地からの問いと考察

ミヒャエラ・グレックラー

### アントロポゾフィー医学—統合医療の契機

アントロポゾフィー医学は、オーストリアの哲学者ルドルフ・シュタイナー(1861-1925)とオランダの医師イタ・ヴェーグマン女史(1876-1943)によって1920年にスイス・ドルナッハで創設されました<sup>1)</sup>。その医学は、コロナ・パンデミックの年に生誕100周年を祝うこととなります。その際興味深いのは、シュタイナーが1920年の復活祭の時期<sup>2)</sup>に行った20の講演の基礎講座において、その頃まだ流行していたスペイン風邪を扱うだけでなく、感染症の一面的な伝染の型の理解について批判的に説明していたことです。1920年の4月7日にはまた、その間に開催された公開の講演でも、民主的に統制された健康と衛生的側面の問題が剥奪されてしまうこと、支配的な学問的意見と政治の厳格な権威に決定づけられることの危険性を警告していました。

「この権威を信仰する非民主的なものは、民主主義への憧れに逆行するように踏み込んできます。(…) 強烈な民主化が、それは今日現代的な関係において可能なものですが、そのような領域で努力されてはならないのなら、民主化が個々の人間に近づき、無限に近づき、またそれによって公的に健康を育成するような人間社会は始まるのでしょうか？」<sup>3)</sup>

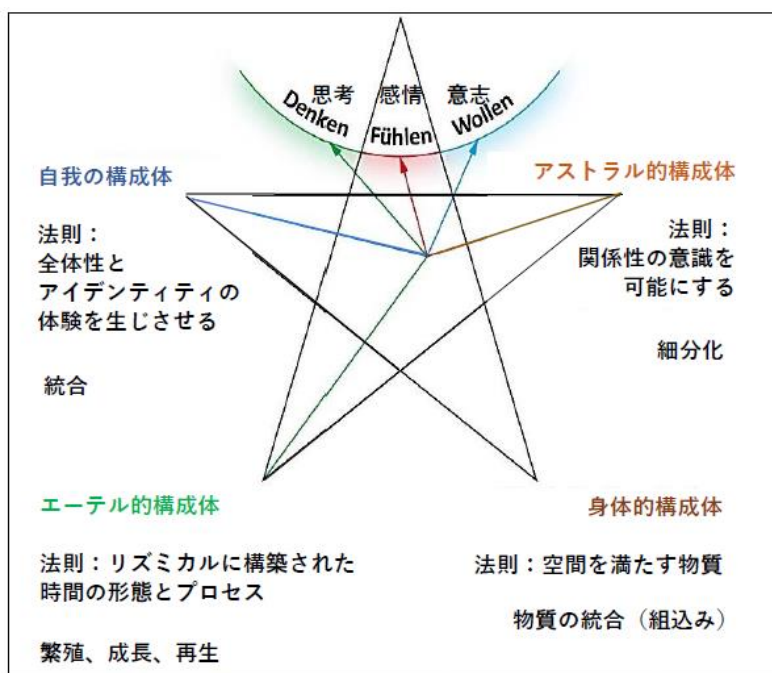
もちろん、シュタイナーは専門的なそして事象的な権威を持つ人たちについて問題にしているわけではありません。しかし、ある健康面での見解が、その健康に関わる人たちの同意なしに国家権力に規定されるあり方は—同時に人間に対する自然科学的思考モデルであるだけでなく、そこに結びつく健康と病の理解の仕方ともなります。そこではすでにアントロポゾフィーという言葉が—ギリシャ語のアントロポス/人間、ソフィア/叡智—人間性を意味する言葉ですが、次のことを明らかにします。シュタイナーが包括的な自己確立と自己発展の権利に関わる問題だとし、そして自分たちがお互いを必要とし、お互いのためにまた共に生きることを知っている成人した大人たちの公共の社会に関わる問題だということなのです。

この言葉を100年後のコロナ危機の渦中で読みますと、この言葉がほとんど劇的なまでの時事問題という気がします。とりわけ、シュタイナーの憂慮と問題提起をビル・ゲイツのそれと比べてみるとです。ビル・ゲイツは「ビル/メリンダ・ゲイツ財団」のウェブサイトでも、先ほどの見解として主張しています。そこで彼は、世界の民族のなかである領域のテストのために、地球規模での予防接種計画と需要に応じた健康面での完全管理を、情報技術の助けによって斡旋しています。彼はまた、国家と個人的な経済がここでは一緒に活動しなければならない、それによってすべてが効率よく行われると強調しています。

これを読みますと、可能性として、現代の学問と経済の権力者が完全に視野に入ってきます<sup>4)</sup>。そのような危険を前にしてシュタイナーは、経済性が「精神的なものの主人」になってはいけないということを強調しました。人間の健康は経済的なものの考え方に仕えてはならず、「社会的な意味」から考えなければなりません。チフスを解釈することには、チフス菌だけでなく全く違う何かが必要とされるようにです。健康面での問いは、社会的状態と教育の問題と強く関係しています。シュタイナーは、健康への意識を持った患者には、「成年に達した人」には、彼にあれこれ云ってくる専門的な知識を持った医者と対等に向かいあうことを要求しています<sup>5)</sup>。そのためには、その基礎となるような学校教育が必要です。病人は何か権威を受け取るべきではなく、いつもできるだけ自分の見方を持つべきです。シュタイナーの信条は、すなわち社会的な問題はいつも教育手段に関係づけられ、そして教育の問題は学校システムと関係づけられる、ということです。経済と政治からの能率的な基準ではなく、子どもたちと若者たちの健やかな成長に方向づけられた学校のシステムにです。そこからまた、1919年のヴァルドルフ学校の設立が求められました。18歳までの人間形成を適切なものとし、そしてそれから初めて、その後どのように生徒たちが教育課程を修了しようとしているかにしたがって準備します。教育はそれゆえシュタイナーにとって、健康に備える重要な部分なのです。すなわち予防医学です<sup>6)</sup>。

アントロポゾフィー医学では、病気になったり身体（的な体質）が衰弱し始めるこの様々なレベルは、それぞれ別様に描写されます。物質体、エーテル体、アストラル体そして自我の有機体と名付けられています。この「有機体」は、ルドルフ・シュタイナーがまた「構成体」として呼んだ法則性と統合的な関係を持っています。—その際、中心的な人間の本質の現れは、物質的—身体的、生きた—魂を持った、そして精神を持ったものと関係します。その際決定的なことは、この法則的な関係性は単に統合的に身体を組み立てるだけではなく、人生の経過においてまた成長や発展を通して、体を構成する活動から自らを解放することができるのです。それは、思考と感情と意志という魂の能力として使うことができます。内的な魂の発展の場を表すものです<sup>7)</sup>。このような考察は、誕生前と死後の人間存在を正しく考えることをもまた可能にします。身体が無くなると、自由な落下の法則が作用するように何か落ちるのではなく、ただ「考える」ことだけができます。そのように人間は、死後再び体を脱ぎ捨てて人生とその時までの発展を振り返るときにも、思考、感情、そして意図において「永遠に」生き生きと思い浮かべることができるのです。

(図)思考、感情、意志への構成体の関係<sup>8)</sup>



人間についてのこのような見方を通して、物質的なレベルで学校医療の可能性を含む統合医療が可能になるだけではありません。それよりもずっと、なぜ健康が、生活様式、魂性そして精神性における自己教育に直接影響を及ぼされるのかということがはっきりと理解できるようになるのです。

この関係性は個々の人間を考えさせます。そして人は、そのことによって思考の精神的現実性を体験することを学びます—自分固有の自我の思考もまた体験します。身体は過去の世界にありますが、自己の存在が「永遠に」故郷とする非感覚的世界に意識的に自分の思考と感情と意志が生きることを学び始める人は、精神界を閉ざしてしまった人とは人生において別の力を持って存在しています<sup>9)</sup>。

このような精神的な人間の姿はまた、物質的な世界観による病気に対する治療手段のあり方として感じとられることもできます。人に、物質的な事象の任意の結果を説明することが病気にしてしまうのではないのでしょうか？その人に、自身の内的本性について明らかにさせないままにいることは、当然不安と憂鬱の原因と捉えられるのではないのでしょうか？そして死後も続く精神生活を完全に馬鹿にし、頭がおかしい或いは学問以前の信仰の事柄と説明するのでしょうか？そこに生態的、感情的な意識を発展させることを難しいと考える人は、当然そうでしょう。

アントロポゾフィー医学は COVID-19 の予防と処置に、どのような可能性を提供するのか？

ベルリン・ハーベルヘーエとヘルデッケ・ルーアにあるアントロポゾフィー病院、そしてシュトゥットガルトのフリーダークリニックは、地域診療(扶助)の一環です<sup>10)</sup>。ベルリン・ハーベルヘーエは危機が始まってすぐにコロナ診療所に指定されました。そして全ての棟が、その集中的治療のキャパシティーを拡大しました。学校医療的な処置の傍ら、そこではまたアントロポゾフィー医療のサポート薬が投入されています。その薬は、体を自己調整する助けとなります。ゲンフ(ベルギー)では、アントロポゾフィー医療の医者が WHO の COVID-19 に関するオンライン会議に参加し、互いに補い合う様々な医療システムについて意見交換がなされました。診療所のつながりの中でそれまでに COVID-19 の患者に照合された診療コンセプトが出されました。その際、そのころ中国で広く使用されていた伝統的な漢方医療 (TCM) の診療コンセプトと興味深い類似性がありました。

クリニックと外来診療においては、熱の処置がその際中心的な意味を持っていました。ウイルスが空気の中で敏感に太陽光と熱に反応するように、有機体においてもそれは同じなのです。身体は、ウイルスを殺すために熱を出して反応します。それに加えて、朗らかな明るい気分と愛に満ちた看護と付き添いは、回復のプロセスのために大いに助けとなります<sup>11)</sup>。ですから解熱剤 (アンチピリン) は、患者の自己反応が弱すぎるときのみ投与されず。そうでないときは、体は物理的-生理的対策 (例えば、ふくらはぎの湿布) とともに、自分の努力で、熱の状態の上昇によってウイルスと戦いポジティブに支えます。そして熱は健康的な範囲で留まって、必要なく下がることはありません。

アントロポゾフィー医療の小児科の医師であるダヴィッド・マルティン博士は、自身のウェブサイト上とビデオで生理学上の熱の処置の基本原則を述べて、多くの熱に対する不安を取り上げて付け加えています。また、熱とアレルギーと免疫システムについての全ての問いへの 12 のインタビューもあります<sup>12)</sup>。重要なことはしかし、十分な睡眠と健康な食事と規則的な身体運動、そして新鮮な空気の中での散歩です。気管感染症に対するアントロポゾフィー的処置のこれまでの経験は、手引きの中でその全容が報告されています<sup>13)</sup>。

魂のレベルでは、ポジティブな感情が健康を保つ助けとなります。なぜなら、感情がまさに、どんな呼吸をするかに強く影響するからです。いかに深くあるいは浅く呼吸するか、規則的でリラックスしているか、或いは緊張してつかえたような呼吸をしているかということに。皆さんも経験からご存知でしょう<sup>14)</sup>。

COVID-19 感染症の時の気管は、とりわけ生命を脅かされるような重篤な肺炎になるまでに、この関係性を意識しておくことがとりわけ大事なこととなります。感染の不安を持つ

とき、人はどのようにポジティブな感情を創り出すことができるのでしょうか？狭い家での関係のなかでストレスと怒りを持つとき、あるいは、病人や年取った家族が心配なのに電話でしか連絡を取れず、訪ねることもできないとしたら。そこにはいくつかの可能性があり、始めの段階としては、音楽が好きならば、音楽が良いでしょう。音楽を聴いて、音楽と結びつくと、すぐに魂の気分と感情の状態と呼吸の動きが変わるのを体験します。また、人生で感謝したり、満足そして幸せだったその瞬間を思い出すこと—そのことは、今は危機であり、しかし確かにまた違うときがやってくることを確信させてくれます。それに加えて自分で行うことのできる祈りや瞑想の箴言が来るでしょう。例えば、このようなルドルフ・シュタイナーのマントラは内的平静さを再び作りだすことを助けてくれます。

私のなかには静けさがあり、  
私のなかには私を強める力がある。  
私はこの力の熱で  
私を満たそう、  
私は自分の意志の力で  
私を貫こう。  
私は感じよう  
いかに静けさが流れ出るかを  
私の存在全てを通して、  
私が自分を強めるとき、  
静けさは力として  
私の中に見つかる  
私の努力によって。

人間関係においては、他者が言おうしていることに意識的に耳を傾けること、そしてすぐに反応するのではなく、受け入れてもらえるように答え方を少しの間考えることは、とても助けになります。健康生成論の研究者であるアロン・アントノフスキー(1923-1994)は、三つの魂の質を見つけました。それらは、人間を内的に確かにし、立ち直ることを可能にします<sup>15)</sup>。この人間関係の対話を家で、職場で練習すると（それが再び可能になった時にですが）

自分自身とそして他者をも、自由に呼吸すること、自らをより健やかに感じることを助けるのです。それらは、人が何かを理解した時にその何かを意味深く体験する、そして何かをすることができることに喜びを感じるができる感情なのです。

この三重の「首尾一貫感覚」、三重の理解可能性、有意味性、処理可能性の首尾一貫感覚は、人間関係の領域で中心的な役割を果たします。理解できると感じることは良い作用があ

りますし、思考と行為の意味を体験すること、一助けることができる、喜ぶことができるという経験もまた同じです。まさに今多くのことができます。たくさんの方が家の狭い空間でなければならない今です。ポジティブにまたネガティブな意味でも体験され、また多くのユーモアと共に練習されます。なぜなら、自ら理解できないこと、意味のないことそして無気力なことを体験する以上に人間を病気にすることはないからです。それはまさに、その感情によって、私たちが私たち自身とそして世界とのつながりのなかにあることを体験する感情に他なりません。関係性はしかし、全ての生命存在の法則です。一周囲とのつながりなしに生き延びる存在などありません。その関係性からこぼれ落ちて切り離されることは、生命に敵対し、病に罹り、そしてそれが長すぎれば死に至ります。

精神のレベルでは、良き考えとモチベーションが免疫を高めます。それは本質的なものに向かい合い、また私たちが単に物質的な体に依って立っているのではなく、思考に到達できる、精神的、不滅のアイデンティティーを持っていることを感じさせてくれます。人が感動した (begeistern=精神化する) 時、または理想を持ってその実現のために力を尽くす時に、突如として人が持つようになる力を知らない人がいるのでしょうか？そして、良き考えはまた人間を精神的に結びつけ、そのことによって私たちは精神的に強くなることができます。人が良き考えを送ることがどんなに強力なものかを、しばしば病んでいる人たちから体験するでしょう。

この「考えの力」はどこからやってくるのでしょうか？よく考えてみれば、すぐに次のことがはっきりとしてきます。まず考えや法則性はつねに、私たちの生活と共有する世界—私たちが作り出す技術的な道具(手段)考えを含めた—に規定されます。法則性が作用します。しかし、法則性はどれも、一つの考えをその基に持っています。考えはいわば作用する力をもった法則性ともいえます。自己教育においては、それは日常経験されるものでもあります。「私は、まずは考えの中で持つことが実現されるように努める。」正直であろうと毎日努力する人は、いつの日か真に正直な人間になるでしょう。そのように信仰と信頼についてもそうです。「私は、私が考えることができるものだけを信じたり信頼することができる。—私がまだ完全に理解できない時には。」ギリシャ語では、信仰と信頼は同じ言葉です。「ピステイス (Pistis)」。信頼はしかし、考えに向かい合っているものです。両者は一体なのです。なぜなら、私たちは自分の考えを、無条件に信頼します—だから、疑いは—それもまた考えです—私たちを苦しめます。私たちがそれに信頼を置かなければ、この考えは私たちに力を及ぼさなかったでしょう。

そこから、言葉と考え、プロテスタントの神学者ディートリッヒ・ボーンヘッフアーが牢内で処刑される何か月前に書き留めたある祈りの中の言葉と考えは、強い働きかけを持ちました。それは間もなく、全ての大きな礼拝集会での一要素となりました。一つの段落を

思い起こしたいと思います。

良き力によって見事に守られて  
我々は平安のなかでやって来るものを期待に満ちて待つ  
神は我々の傍らに昼も夜もおいでになる  
どの新しき日にもきっと。

このような思考と言葉はですから、直接的な癒しと自我を強める作用を持ちます。なぜなら思考は自然法則として物質的な世界を支配するだけでなく、目に見えない神的—精神的  
世界への橋でもあるからです。思考を通して、ここもまた自分の故郷であると学び、この世界に由来する目標と理想と一つになる人は、涸れることのない健康の泉を開いたのです。

というのは、まず免疫システムは、私たちの身体的なアイデンティティーで確立します。しかしこれは、獲得された魂と精神の免疫性を通して強められ影響を受けます。それは、私  
たちを感動させ、また人生に意味を与えるものと一体になることを通して生じます。ゲーテ  
は、この考えの永遠性と不滅性の体験を『遺言』という詩の中で表現しました。

無に帰するものなどありえない！  
永遠なるものが万物を動かしている！  
存在に身をゆだねれば、幸福を知る！  
存在は永遠であり、法則が  
生きる大切なものたちを守るかぎり  
すべては美しい。

ルドルフ・シュタイナーは、この永遠の価値と理想を、ある時ある一人の児童のためにこの  
ような形で表しました。

美しいものに驚くこと、  
本当のものを守ること、  
貴いものを敬うこと、  
善きことを決意すること、  
それは人間を  
生きること目標へ導きます、  
正しくなるまで行い  
平和になるまで感じ、  
光輝くまで考える

そうすることはまた  
人間に信頼することを教えてください  
存在するすべてのものの中に  
宇宙の中に 魂の中に  
神様の御心があることを。

アントロポゾフィー医学は、統合医療として理解されます。それは、その治療の手がかりを人間存在の全てのレベルにおいて、個々の人間に与えられたものに適合させます。

### この危機の中で子どもたちにとって大切なものは何か？

良いニュースは、これまでに分かったこととして、子どもと若者は重症にならず、ほとんど害がないかまたは無症状であることが見て取れます。加えて、ドロステン博士はまた、4月16日の北ドイツ放送のポッドキャスト（ブログ）で、公には主婦(主夫)にも少ない感染者しかいないことを述べています。おそらく、これまで気づかれていない陰の免疫性がコロナウィルスの感冒によって与えられていたと考えられます。

ディーター・フックスは2020年4月17日付シュトゥットガルト新聞上の彼のコメント「家庭負担-政治は、親と子をこの危機のなかで支えなければならない」の中で、家にいることの問題を次のように指摘しています。

「未成年の子どものいる11,400,000の家庭が、生業、学習、児童福祉を支えてくれる人々からの隔離が進められ強制されている。特に、小さい子どものいる家庭にとってそれが続くことは不可能なことである。精神的また経済的な問題は、政治によって今まで必要な注意が考慮されてこなかったことによる困難である。変わらなければならない。(中略)それは、個別の解決策が必要であり、児童福祉局によって進められる。それでなければ教育を受けていない或いは貧しい家庭はその枠からこぼれ落ちてしまう。何よりも子どもたちのために多くが為されなければならない。一つの世代がコロナに脅かされる。(中略)教育の機会均等、移住地選択の自由と社会的なやり取りは、黙殺される。保護者と子どもたちが何か月もこの重荷を背負わされる社会は、そのために高い代償を払うことになるだろう。」

これは本当のことです。そしてしかしまたこれも本当です。保育所や幼稚園、学校現場で責任者によって動員されるもの全てが強制的な閉鎖と補助的対策にある間、オンラインと電話でのアドバイスを提供し、連携を示すことです。ある先生は、例えば毎日家に子どもたちを訪ねました。毎日Eメールやドロップボックスなどの方法で親と課題について話し合いました。別の先生は、多くの子どもたちと手紙のやり取りをしました。なぜなら、危機の際に子どもたちにとって最も必要なものは何でしょうか？最も大切なものは？**人間的な**



結びつき、目の前にその人がいること、近くにいることです。

どんなコロナのパニックの中にあっても世界は大丈夫なのだという感情を子どもたちに与えられる大人が目の前にいること。戦時下にあっても、大人が内的な確かさと人生への信頼、未来への静かな確信に満ちた期待によって輝くことができた時、子どもたちはいつも必要とするだけ守られていたのです。そして、子どもたちのために、人はそれら無しよりもずっと容易にそれができたのです。一緒に遊び、読み聞かせをし、話をし、歌い、絵の具で絵を画いたり、クレヨンを使ったり—すべてが結びつきを強めるために大きな助けとなる手段です。直接的に人間的なつながりを深め、近さを感じとること、それは魂の栄養であり、このような時には、食卓で良い食事を摂ることよりももっと重要といえます。

もっと家でまたは周囲でできることは何でしょうか？子どもたちが家の仕事でいつも一緒にできるのは、家で料理をし、掃除をし、片付けること。大人が楽しそうにそれをしていると、近くに寄って来て一緒にやりたがります。散歩のときは、子どもの視線を持って、良い天気、花、雲、風を観察したり、発見したり、喜んだりしましょう。

そして、最も重要なこととしては、コロナ危機に伴う現象に、それによってデジタル化がとてつもなく強烈に推進されていることがあります。社会的な隔離は、コミュニケーションを電化的なメディアに移行させ、境界封鎖や旅行の禁止は、その代わりにヴァーチャルな Zoom や skype によって会うことが推奨されました。学校は E-Learning を提供し、そしていずれにしても家ではメディアの場所があります。そして、映像を制限することは日々の戦いであり、困難であるかまたは全く不可能です。それだけますますこの立場について云われなければならないのは、体の成長期に子どもと若者の健やかな脳の成長を破壊し、損なうもので長く映像（画面）を見過ぎる時間より良くないものはないのです。殊に、生まれてから最初の三年間は、脳が最も速く成長する時期であり、そのことから金科玉条となります。「三歳以下—映像（見ること）禁止」

「デジタルメディアにおける健やかな成長」というメディアの案内書は、人間的な教育のために作られており、この関係において強くお勧めします<sup>16)</sup>。それは、独立した研究の基盤に立つのみでなく、神経生物学的な関係性を理解するために必要な学問的な基礎も提供しています。それはまた、若者の脳の電磁波に対する増幅した感受性も解説していますし、若者たちサイバーでのいじめやインターネットの他のネガティブな影響、また社会的ネットワークから守ることができるかの可能性についても明らかにしています。

とりわけ、その中で重要なのはポジティブな助言です。子どもと若者たちに年齢にふさわしい教育と成長の示唆を与えるために、映像を見る時間の場で何ができるかです。人間の脳

は、前脳の指令中枢が自立した思考、責任感そして自主的な善悪の判断能力が熟すまで 16 年が必要です。

しかし、人はいかに最も良い形で脳の成長を促すことができるのでしょうか？全身を使った活動によってです！脳障害をもった赤ん坊が体操で治療されるように、ある決まった動きのモデルを通して、損なわれた箇所は再生と保護へ促されます。その障害のある領域からではないのです。興味深いことにまた、痴ほうの予防にもこの方向性が勧められます。クロスワードや暗算はお勧めしません。そうではなく、身体的な器用さ・調整・動きの練習です。そのような芸術的な行為、絵を画くことや、彫塑、歌うこと、音楽を奏でること、人形芝居、それに学校でやるような古典的なこと、例えば手書きで難しい字を習うこと、包括的な身体全体の行動が脳の成長を最も持続させるよう働きます。それに反してタッチパネルをたたいたりなでたりすることはそうではありません。身体の自己能動性と包括的な知覚的な統合活動が映像画面を継続的に排除するのです。

見るという行為がすでに、映像の前では健康な目がすることとは逆になります。何かを見るとき目の筋肉は能動的であり、言葉の真の意味で、観察の対象の知覚（訳注：wahrzunehmen＝真に受け止める）のために動きます。それとは逆に、画面の前では映像が動き、目の筋肉はこわばり能動性を失います。すでに出来上がった脳の構成体をもっている大人にとってはそれほど問題ではありませんが、随時長く職業的に或いはプライベートでも画面の前に座っていることは、子どもと若者たちにとって器官成熟に永久的な誤った刺激となります。

その結果どうなるのでしょうか？人は、目の前に置かれた型に合わせて反応することに慣れていきます。想像力や感情移入の力、自立した思考は、その人の成長の中で抑制されていきます。ですから、ヴァルドルフ教育においては次の原則が適っているのです。自ら物事を学ぶという自分のイニシアチブを、消費するのではなく促進します。コンピューターにそのイニシアチブをゆだねる前に。－それは、人間らしい核となる能力を促進します。教師たちには、エドヴィン・ヒューブナー博士によって作られたメディア教育のヴァルドルフ教科課程を勧められるでしょう。それは、内容豊かな示唆を提供しています。創造的なやり方でメディアに対する責任を持ち、メディアを正しく使いこなす大人になるように働きかけます<sup>17)</sup>。エリアント連盟のイニシアチブもまた触れないわけにはいかないでしょう。それは、「人間らしい教育のための連盟」と一緒に映像から解放された幼稚園と小学校を始めています<sup>18)</sup>。

**危機は私たちに何をもたらすのでしょうか？**

ペーター・ダブロック教授とシュテファン・アウグスベルグ教授によるドイツ連邦政府の倫理委員会からこのような報告がありました。

「連邦議会と連邦政府に助言し、しかしまた公開討論に持ち込むという法的な課題をもつ委員会にとって、絶対的に対立する論争を止めることは当然不安への根拠はないということになる。論争は政治より何より、開かれた社会の表明として迎えられることが可能であり、またそうであるべきである。なぜなら、すなわち人々がすでに賞賛に値するほどの連帯責任を示し、そして部分的には非常に徹底的な買い物の自由の制限にもほとんど不平を云わないならば、この現代の未知の挑戦を反省すること、またあるいは自分自身や他の人たちに負担を強くことに注意を促すことを不安視したり、講じられた処置が釣り合いのとれたものかどうかを調べたりすることに否定的な見解を述べる権利はない。この背後関係の下では、法に適っているだけでなく、自分で考えることが必要である。これからどのようになっていくのか、どのような条件下で公的な展望が責任を負うことが可能なのか、あるいはそれに加えて必要とされるのか。『コロナ危機は民主的、合法的な政治の授業 (Stunde) である』。この一文で、我々は自分たちの態度を表明することにしよう—公衆が共感する場を長く多く探していけばいくほど、これは行動する政治の決意を強める誘いとしてまた要求として理解されるだろう。この公衆である市民には、彼らの側からはある忍耐が代償として要求されなければならない。なぜなら、危機の最も高い点は我々の目前にあるからである。解除を決めるのは早すぎる。しかし、解除のための基準を考えるのに早すぎることはない。他のことは何も、我々に使われるべきではない、住民への必要な信頼を強めるようにはならない官僚的な思考である。(中略)我々は、全て—あるいは—何もない思考と行動の道を行かなければならない。危機が長く続くほど、聴くべき声が増えるだろう。我々は、多くの人々が違った反応をもつこと、しかしまた正当な興味を言葉にすることに不安をもつ必要はない。」<sup>19)</sup>このような勇気ある声は、ハンブルグ—エッペンドルフの大学病院の法医学研究所長である、病理学者クラウス・プッシュェル教授による。彼は、4月2日のハンブルグニュース紙で彼の検査について述べている。そこでコロナウイルスと診断され亡くなった方の死後実施した検査で、重い既往症によって弱っていた人でない人の事例は、一件もなかったのである。そのことから彼は、いわゆるコロナ死者は推測される感染の危険による衛生的な観念から解剖は勧められないというロベルト・コッホ研究所を激しく批判した。生きている者は、死者から学ばなければならない。彼の判断からは、毎年の流感の季節にあらわれる、高齢者における典型的な死という結果に関わる問題であるといえる。また若くして亡くなった人も何例か知られているが、何が最終的に死に至らしめたのかが究明されるだろう。

これを全部読んだとき、私はルドルフ・シュタイナーの保健行政制度の民主化への主張を考えました。—今の危機においてほど、この要請がよく催促されている時はないでしょ

う。今や至る所で包含されたデジタルでの監視国家の前に立った不安に対して、マサチューセッツ工科大学のヨーゼフ・ヴァイツェンバウム教授の引用をしたいと思います。彼は、20世紀において米国でのこの技術に最も影響力を持ち、革新的に発展させた人の一人です。『1984年』のオーウェル年のインタビューのなかで、彼は完全な監視管理社会は来るのかという問いに答えて云いました。

「もちろん、徹底的にそこに向けて働きかけられていくでしょう。しかし、そのときがこの国家にその時が実際にやって来たら、その社会は、コンピューターがその罪を担うよりずっと早く、人間は自分の自由をもはや守らないという結果をもたらすでしょう。」<sup>20)</sup>

それから彼は、スターリンとヒットラー政権を例として、コンピューターなしでも完全な監視社会がいかに可能であるかに言及しました。そして、人類の実りある未来は、道徳性と同胞性の発展に大きくかかっていると云いました。それはしかし、未来の教育システムの最も重要な挑戦です。デジタル化を通してそれが決定的な促進を遂げると思っている人は、全く正しくありません。道徳性は教えることはできません—対価的な意識によってほとんど無理です。アプリを通してダウンロードすることはできません。道徳性は、人間との具体的な付き合いを通してしか発展させることはできないのです。そのために、手本となるような、そして子どもたちや若者たちと一緒に生活し活動することができる現実の人間が必要です<sup>21)</sup>。

そして見る勇気が湧いてきます。不安と心配の傍らで、今いかにポジティブなものと救いがまたこのコロナ危機において生じたか、そしてさらに生じようとしているかを。多くの人間が云い、また書いています。本当に大切なものとは、そして真の喜びと本来何なのかを考え、また語ることをいかに再び始めたかということなのです。多くの人にとってははっきりとそして突然腑に落ちることになります。それはリアルな人間関係であり、その上で、さらに成長を続け、より「人間らしく」なるようにさせるものです。しかしそれはまた、この危機を見直すことの枠内において、—とりわけ経済的、そして健康状態の本質に関して—危機の前に支配的だった考えよりも別の考えに導かれつつ。

私たちはもちろんまだその渦中におり、私たちの健康がどの程度であるのかは、私たち自身とその状況についてどのように考えるかに関わってくるのです。

### コロナ後はどうなっていくのか？

以前と変わらないのでしょうか？アルベルト・アインシュタインの有名な引用からです。

「常軌を逸した行為の最も純粋な形、全て古いことをそのままにしながら同時にそれが変わることを望むことだ。」

ほとんどの人たちがすでに、何年も何かしら感じています。根本的な文化の転換が必要だと。どのようなやり方で営まれていくのか—私たちの制限ある地球での成長の限界はいつ真剣に受け止められるのか？いつの日かまた最後の原生林が伐採され、それは最も広範囲の大地が、肥料をやりすぎることによってずっと先まで実りが期待できないところまで損なわれ、そして気候の危機もこれ以上もたなくなっています。

それなのに、私たちは洗練されたマイホームでキッチン機器と通じていて、いつもの家事では Alexa などの電動アシスタントのスイッチを入れ、そしてインターネット上で提供されるものとコミュニケーションをとるのです。人はもはや自分でドアを閉める必要はありません。家に入るときにはお気に入りの音楽が響きます。ほんの少しの時間働けばいいだけです。すべてがうまくやりくりされ、自分の住まいはつねにすべての情報を呼び出すことができる世界になっていきます。そのために失業者の数はどんどん増え、戦闘地域や危険地域の悲惨な状況は増大しています。条件なしの基本収入があるならば—お金はそこにあり、再分配されなければならないだけです。—そうならばそれによって、経済がうまく回るための十分な消費能力が確かなものとなります。しかし、思考と経済の方向性が基本的に変化しないならば、今この危機に私たちを導いた発展がそのまま続いていくこととなります。

レイチェル・カーソンの「沈黙の春」やローマクラブの「成長の限界」のような素晴らしい本の出版がなされています。ルドルフ・シュタイナーが第一次世界大戦後にすでに行っていた提案は言うまでもありませんが。

◆経済生活のためには、販売までの価値を作り出す鎖に関わるもの全員が、消費者と同じ席について、持続する生産、働く上での妥当な条件、そして許容できる値段について合意し、関係者全員が納得できるようになるような、共同組織です。それはしかし、量よりも質ということを意味します。それは、成長のイデオロギーを、循環と相互作用におけるエコロジーに向けられた思考に取って代えることです。それは、人間、自然そして大地の生命に長期間適合するのです。

◆自立した自由な文化生活のために—学校、教育施設、大学、芸術的な活動—それは、教育プランとは独立して発展させることができ、その資金の調達、影響力の行使とつながってはなりません。なぜなら、自由と自立性は重要な教育目標だからです。

◆法的生活のために—政治が法律と大枠の条件を決める中で、経済生活と、文化生活は、社会的な生活と調和することができます<sup>22)</sup>。

エルンスト・ウルリッヒ・フォン・ヴァイツゼッカーとアンダース・ヴィークマンが「我々は渦中にある」という本を書いたのは素晴らしいことです<sup>23)</sup>。この巻は、ローマクラブの33の会員と共にローマクラブ設立50周年の2018年に作成されました。国家と経済

における責任者の一部分でもこの本を読んで真摯に受け止めてくれるとしたら、人類は最も良いチャンスを持つでしょう。なぜなら、危機は私たちに何を教えるのでしょうか？ウイルスの研究が私たちに教えるものは何か？なんとすべてが関係しているのでしょうか？私たち人間はエコシステムの一員であり、そして私たちの人生の部分である生活は私たちの惑星の上にあるのです。

私たちは、融和をもたらす人間と社会の理解への活動を必要とします。その理解はまた存在の精神的な側面も含みます。それはまた、一つの不滅の精神を必要とし、感覚世界と精神界の間の橋としての思考を支え、そこからその程度によって人類の文化発展を成し遂げます。そのためにアントロポゾフィーは、その全体的な文化のイニシアチブをもって、今まで比較的よく知られてきた医学、教育、農学の領域だけではなく、社会的そして経済的な分野でも今まで以上に貢献することができます。dm—薬品市場チェーンの創業者であるゲーツ・ヴェルナーや、ライト・ライブリッド賞の授賞者でエジプトにおけるセケムの文化イニシアチブの担い手であるイブラヒム・アブレイシュのようなパイオニアが示してくれたように。

(翻訳：吉野一恵)

本稿は、2020年5月 Books on Demand 社刊行の『**コロナ—一つの危機とその克服** アントロポゾフィー的な理解の助けと医学的—治療的な示唆 (**Corona-eine Krise und ihre Bewältigung** Verständnishilfen und medizinisch-therapeutische Anregungen aus der Anthroposophie) ISBN 9 783751 917919』に収められているミヒャエラ・グレックラー『コロナ危機への医学的見地からの問いと考察(Michaela Glöckler: Fragen und Überlegungen zur Corona-Krise aus medizinischer Sicht)』からの抜粋である。グレックラーさんのご厚意によって翻訳の許可を頂いた。

註及び出典：

- 1) ミヒャエラ・グレックラー『アントロポゾフィー医学とは何か?』参照

- 2) ルドルフ・シュタイナー 『精神科学と医学 医者のための第一講義』 GA312, ドルナッハ、2020年
- 3) ルドルフ・シュタイナー 『社会問題としての衛生学』 1920年4月7日の公開講演、『専門科学とアントロポゾフィー』 GA73a、ドルナッハ、2005年
- 4) Vgl. auch hierzu den Beitrag von Andreas Neider.
- 5) 6) Ebd.
- 7) ルドルフ・シュタイナー、イタ・ヴェーグマン 『精神科学的認識による治療芸術の広がりのための基礎』 GA27、ドルナッハ、1991年参照
- 8) 図は、ミヒャエラ・グレックラー 『健やかな成長の場としての学校。21世紀の教育のためのヴァルドルフ教育からの経験と観点』 シュトゥットガルト、2020年より抜粋
- 9) Siehe dazu auch den nachfolgenden Beitrag von *Andreas Neider*.
- 10) Vgl. [www.tagesspiegel.de/berlin/neue-coronavirus-ambulanz-in-berlin-spandau-wir-sehen-eine-extreme-verunsicherung-der-bevoelkerung/25622712.html](http://www.tagesspiegel.de/berlin/neue-coronavirus-ambulanz-in-berlin-spandau-wir-sehen-eine-extreme-verunsicherung-der-bevoelkerung/25622712.html)
- 11) Vgl. [www.tagesspiegel.de/berlin/neue-coronavirus-ambulanz-in-berlin-spandau-wir-sehen-eine-extreme-verunsicherung-der-bevoelkerung/25622712.html](http://www.tagesspiegel.de/berlin/neue-coronavirus-ambulanz-in-berlin-spandau-wir-sehen-eine-extreme-verunsicherung-der-bevoelkerung/25622712.html)
- 12) [www.warmuptofever.org](http://www.warmuptofever.org) , [www.youtube.com/watch?v=iVURD9lmteU](https://www.youtube.com/watch?v=iVURD9lmteU) sowie [www.medsektion-goetheanum.org/anthroposophische-mezizin/care-praxis-anthroposophische-mezizin/umgang-mit-fieber-und-infektionserkrankungen-care-ii/](http://www.medsektion-goetheanum.org/anthroposophische-mezizin/care-praxis-anthroposophische-mezizin/umgang-mit-fieber-und-infektionserkrankungen-care-ii/).参照
- 13) *Vademecum Anthroposophische Arzneimittel*, Supplement *Der Merkurstab* 70, Berlin 2017. Für die Selbstbehandlung zu Hause bei leichteren Formen der Infektion kann ich die Publikation von Markus Sommer, *Grippe und Erkältungskrankheiten natürlich heilen*, Stuttgart 2009, sehr empfehlen.
- 14) Siehe dazu auch den Beitrag von Andreas Neider.
- 15) アーロン・アントノフスキー 『健康生成学—健康の脱迷信化へ』 テュービンゲン、1997年
- 16) Siehe das Literaturverzeichnis.
- 17) [www.waldorfschule.de/fileadmin/bilder/Allgemeines/BdFW\\_Medienpaed\\_an\\_WS.pdf](http://www.waldorfschule.de/fileadmin/bilder/Allgemeines/BdFW_Medienpaed_an_WS.pdf). In diesem Zusammenhang möchte ich auch auf die Initiative „echt dabei“ aufmerksam machen und deren ausgezeichnete Website: [www.echt-dabei.de](http://www.echt-dabei.de), die ebenfalls hilfreiche Anregungen vermittelt, was man an Stelle des Bildschirms setzen kann. Für weitere Hinweise sieh auch das Literaturverzeichnis.
- 18) [www.eliant.eu](http://www.eliant.eu)
- 19) [www.ethikrat.org/fileadmin/PDF-Dateien/Pressekonferenzen/pk-2020-04-07-dabrock-augsberg.pdf](http://www.ethikrat.org/fileadmin/PDF-Dateien/Pressekonferenzen/pk-2020-04-07-dabrock-augsberg.pdf)

- 20) Joseph Weizenbaum, *Kurs auf den Eisberg. Die Verantwortung des Einzelnen und die Diktatur der Technik*, München 1987, S. 104
- 21) Siehe die Petition des „Bündnis für humane Bildung“ unter [www.elianteu](http://www.elianteu)
- 22) ルドルフ・シュタイナー 『社会問題の核心』 GA23、ドルナッハ、1976 年
- 23) *Wir sind dran: Was wir ändern müssen, wenn wir bleiben wollen - Club of Rome: Der große Bericht*, München 2019.